

令和5年度第4回第11期国分寺市立子ども家庭支援センター運営協議会

日 時：令和6年2月17日（土） 午後1時30分～午後3時30分

場 所：国分寺市立子ども家庭支援センター 2階 地域活動室

出席委員：辻、高橋、村松、佐土原、賀來、波田、岡本、三上、片岡、井原

会 長：定刻になりましたので、今日は第4回目の運営協議会ということで始めたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

1月末に私もコロナになってしまいまして、その後、ぜんそくになったと。なので、途中ゲホゲホするかもしれませんが、多分ぜんそくだということで、あまり冷たい目で見ないでください。

それではまず、会議の成立状況について事務局からお願いします。

事 務 局：委員より欠席の旨、連絡を頂いております。つきましては、本日出席委員10名、欠席委員1名、委員の過半数出席がありますので、国分寺市立子ども家庭支援センター運営協議会設置条例第6条第2項に基づき、国分寺市立子ども家庭支援センター運営協議会が開催できることを確認しております。どうぞよろしく願いいたします。以上です。

会 長：ありがとうございます。それでは、早速始めたいと思います。

今日の議題について、お手元の次第のとおり、「子ども家庭支援センター地域組織化事業における父親支援の取組について」ということで、本日成案を得たいということがございます。ということで、字句等確認をしながらまとめていきたいところがございます。

それでは、お手元にごございます資料19について、事務局より説明をお願いいたします。

事 務 局：本日もよろしく願いいたします。

本日の配付資料だけ確認をさせていただきます。本日、事前にお送りしました資料19の答申素案と、資料20、資料21が本日机上配させていただいているものとなります。資料20は「こども家庭センターの設置について」、資料21が「親子ひろば事業の利用者アンケートの結果について」、以上3点となります。お手元にない方はいらっしゃらないですか。大丈夫ですか。ありがとうございます。

それでは、資料19の答申書（素案）のご説明をさせていただきます。前回の皆様のご意見を踏まえまして答申案を作成しております。

諮問の後に、検討内容や対応策を答申というところに書いておりましたが、今回、結論という形で答申を最初にまとめ、別紙に皆様のこれまで検討いただいた内容を取りまとめるという形にレイアウトを変更しています。

3ページ目の2「子ども家庭支援センター地域組織化取組の推進について」の(1)に、現在行っている父親支援の現状について記載をしています。

(2)で皆様に議論いただいている課題についての整理を記載しています。6ページ目の(3)、こちらについては対象とする父親について、年齢と関わり度合いを一緒になっていたものを、関わり度合いと子どもの年齢をアとイという形で分け記載をしています。子どもの年齢については、協議会の中でお話がありました小学校への移行期の部分についてを記載しています。(4)に「子ども家庭支援センターが担う父親支援について」ということで、最後に皆様の意見を取りまとめており、この中に男性が使える設備的なところが少ないという議論がありました部分を盛り込んでおります。

最後に、2番としまして子どもの健やかな成長のためにということで、今現在の子ども施策に係る社会情勢のところを触れながら、父親支援のところ、子ども家庭センターの担うべきところを記載させていただいているものになります。

雑駁ではありますが、説明は以上となります。本日も議論をよろしくお願ひいたします。

会長：ありがとうございます。では、お手元の資料を確認していただきながらということで、答申の組み方が変わったというところと、あと表現方法、ここも少し工夫を頂きました。子育て、共働きとか、あるいは性別役割分業とか、そういったところが今いろいろ議論になっていますけれども、できるだけそこを価値中立的にやっていこうと、やりたくてもやれないと、いろいろな状況がありますので、そこはネガティブに捉えることもないかなということで、できるだけ価値中立的な子育てへの関与と表現にさせていただいたりしています。

そして、就学前のところと就学移行のところと時期を分かりやすく明記していただいたところかなと思います。

いろいろ前回議論いただいたかなと思いますけれども、ご質問等あれば、まず、1ページ、2ページのところ、大枠のところでございます。答申ということで、まず全体像を示しているところでございますが、基本的には、子ども家庭支援センターが資源そのものになるというよりも、資源を開拓していく、つなげていく役割を担っていくということを感じたという感じになります。この1、2ページのところで、ご意見、ご質問等ありましたらお出しいただければと思います。

では、ざっくり読んでみまじょうか。子ども家庭支援センターで実施中の父親支援事業「パパトーク」のように、父親同士が話し合う機会を作る事業については、子育て不安の軽減を図るだけでなく、地域とのつながりを作るきっかけづくりとして必要なものである。今後は子ども家庭支援センターの取

組を、親子ひろば事業などの地域の取組につなげ、話がしたいときにいつでも参加することができるよう継続されることを望む。

事務局：また、共働き家庭の増加や子育てに対する意識の変化により、家事や育児を分担し、夫婦で共同し子育てを行う家庭が増えてきている。市民の価値観、家事、子育ての在り様は、多様化しているのが現状である。これらを踏まえ、社会の変化や子育て家庭のニーズを捉え、家庭での役割や性別等を分けた取組に限定せず、子育てを行うすべての人を対象とした取組を検討し、地域の社会資源の開拓につなげることが大切である。

そのため、子ども家庭支援センター地域組織化事業については、子育て家庭のニーズや課題に応じた取組を開拓し、その取組を地域に広げていくなどのフロントランナー的な役割を担うことを求める。

別紙に、本協議会が整理した課題や事業の方向性等について、取りまとめた。本事業の推進のために参考とされたい。

会長：ありがとうございます。ここ大枠のところですので、確認をしたい、あるいはここってどういう意味内容か、そういったものを含めてご意見等いかがでしょうか。あるいは、また最後にここに帰ってきてもいいかなと思います。

では、順次3ページ以降、確認をしていきたいと思います。

事務局：では、まず別紙1、本協議会の答申検討について。

男性の育児参加が増加する中、近年、父親の産後うつが増加している背景をもとに、市より子ども家庭支援センター地域組織化事業における父親への支援の取組について諮問された。

本協議会では、子育ての役割分担、子育てに関わる困難やその支援の必要性は、「母親」「父親」という性別のみで分けることは困難であるとの共有理解のもと、「父親」という属性や社会的役割の中で現に生じている父親固有の子育ての悩みや支援課題に着目したうえで、現在の父親が抱える困難を検討した。また、地域、近隣市で行われている父親支援の取組について市から提出された資料をもとに確認し、父親の子育てに関わる困難や課題を整理した。洗い出した課題等をもとに、子ども家庭支援センターが特に支援していく必要がある対象者や対応策について検討を行った。

会長：ありがとうございます。ここでも父親というのが諮問の内容でありましたけれども、ご議論いただく中で、果たして父親という縛りでいいのかというところがいろいろ議論にありましたので、そこを踏まえて書き出したというところですが、ただ、父親という縛りが有効でないわけではないので、そういったくりの中で問題意識を共有しながらやっていったところでございます。1番についてご意見等ございますでしょうか。よろしいですか。

では、2番の(1)ですね。

現在、子ども家庭支援センターの父親支援事業の一環として「パパトーク」が実施されている。本取組は、女性職員が入らず、男性による男性のための集まりとして、平成26年度より実施され、取組当初は定期的に参加する父親も多く、参加者同士で連絡先を交換し、子ども家庭支援センターの外でも交流するなどのことがあった。新型コロナウイルス感染症の拡大により、定期的な開催が難しくなったことなどもあり、近年では参加者が少なくなってきた。

こうした現状を踏まえ、子ども家庭支援センター内にある親子ひろば事業実施場所を利用する父親から意見聴取し、テーマが明確でないと参加しにくいとの意見を得て、令和5年度より、フリートークのテーマを明確にするとともに、ミニ講座を一緒に行うことで、新規参加者を増やす取組を始めた。また、ホームページ、X（旧ツイッター）、ぶんじ子育てナビアプリ（母子手帳アプリ）への記事の投稿、市内親子ひろば事業実施場所での掲示など、広報にも力を入れたことにより、参加者が増加し、定員を超える回も増加している。

参加者は、日常的に子育てに関わっている父親が多く、地域の遊び場の情報収集だけでなく、自身の子育てに対する不安や悩みを、家族以外の人と情報交換や意見交換したいとの声も聴かれ、フリートークに対するニーズは高いことが窺える。

今年度、市内親子ひろば事業実施場所において、積極的に周知したことにより、市プレイステーションで実施する親子ひろば事業において、男性職員による「P a p a ' s T a l k T i m e」が実施され、父親を対象としたグループトークイベントの取組が地域に広がりを見せている。

ここは取組の内容なのでそんなにあれかなとは思いますが、ここから先ですかね。

現在の父親が抱えている困難について。父親が育児に参加しにくい状況や、その抱える困難の要因としては、経済面や職場の理解などの社会的要因に関すること、家庭内での役割分担、夫婦間の価値観の違いなどの家庭に関すること、子どもの発達や接し方などの知識や経験が不足しているなどの子どもに関すること、子育て支援に関する情報不足や地域とのつながりの希薄化による地域に関することなど、父親本人が育児をしたいと願っている、あるいは、関わろうとしているが、十分な支援が得られずに、その役割を果たすことができていない状況におかれていることが推察された。

ということで、協議会において上がってきた課題ということ、ここは皆様のご意見を掲載しているところになります。

経済的な不安：育児参加のための休暇取得や残業しないことによる収入減への不安。

職場の理解や昇進への影響：育児で仕事を制限すること（子どもの病気、育児休業等）により社会から取り残される不安や職場内の理解不足、その雰囲気による休暇の取りづらさ。

時間的ゆとりがない：共働き増加、祖父母の高齢化や実家など頼れる存在が近くにないことにより、（夫婦ともに）仕事が多忙で時間的なゆとりがないため、気持ちに余裕がなく、また子どもに関わる時間が少ない。リフレッシュ時間が少ない。

家庭内の役割分担への戸惑いや課題：夫婦間の役割分担の難しさ、家事育児にそもそも不慣れ、子どもに「母がいい」と言われる寂しさ。

夫婦関係、家族関係の課題：育児や教育の価値観・方針が異なり意見が合わなくなる。父親の活躍の場が限られ、家庭内で孤立や疎外感を感じる。家事育児の主導権を持つ妻の期待に沿わず責められる。

子どもへの対応の仕方がわからない：個別性のある子の発育・発達が理解できず、過度な要求・期待をしたり、対応方法がわからず、その結果思ったとおりにうまくいかない（子どもが言うことを聞かない、期待したとおりにできない）ためイライラする。

父親（男性）の子育て相談先や機会が少ない：育児相談の支援者は女性が多く相談しづらい。

地域とのつながりの希薄さ：在宅ワークにより地域で過ごす時間が増えている反面、近所づきあいの減少、コロナ禍による影響（地域の祭りやイベント減少）もあり、つながりが持ちにくい。保育園や小学校など子どもの成長と共に仲間ができる場合もあるが、PTAなどのネットワークは母親中心のことも多く入りづらい場合もある。

サポートや社会資源の情報を把握しにくい：情報の多くは母親を通じて把握している。

ということで、ここには率直に皆様から提起いただきました現状、課題を列記するような形になっておりますが、ここまでのところで、表現あるいはニュアンスなど、あるいはここどうなっているのかなというご質問、ご意見等ございましたらお出しいただければと思いますが、いかがでしょうか。

副会長：先ほどの2の（1）の現状のところにも関わることなのですが、今、パパターキングをさせていただいている中で、コロナ禍で参加者が少なくなってしまったというところの課題はここに出てきているのですが、参加者が日常の子育てに関わっている父親が多くというところで、それ以外関心が向きにくい人に対する支援が不足しているところが、後に出てくるのかも含めてですけれども、今、足りてないところというのが出てくると、それ以後の、こちらの提案するものが分かりやすくなるかなと思っていて、どこに入れるかというのはあるのですが。比較的（1）だけを読むと、コロナで参加者が少なくなった以外は、特に

現状問題がないようにも読めるかなと思っていて、むしろ拡大をしてきているという表現になっているので。

なので、(1)の父親支援の現状についての、4ページ目の真ん中で、参加者は日常的に子育てに関わっている父親が多くという記載の後ろか何かに、他方、子育てに関わりや関心が向きにくい父親をこの取組に取り組むというか、参加していただくことにはつながっていないというような一文を入れるといいかなと思ったりしています。ちょっと後ろの分類にも生きてくるかなと思っています。

ほかには特になかったのでしたっけ、課題というか、今までの議論の中で。

またちょっと前の話になるのですが、母子手帳アプリは、父親も登録できているのでしたか。お父さんの立場だと情報に接しにくい今の立場というお話があったかと思っていて、その辺りも現状のところに入れるといいかなと思っています。

会 長：6ページの⑨辺りですかね。サポートや資源の情報を把握しにくいというところ。

副 会 長：そうですね。

会 長：私もそうなのですが、連れ合いに任せきりになっていて。

事 務 局：今、委員おっしゃったように、当市が把握している現状の課題として、パパトーキングをやってみた人が少ないというのも課題が、あと、来ている人は実際にはよくやっているお父さんが多くて、そうじゃない人はどうなっているのかなとか、地域組織化を子家センでやらなければいけないけれども、そこに働きかけていないのではないかというのがスタートのところだったので、そこをちょっと盛り込む形にして、情報にそもそも触れ切れていないとか、奥さんから聞くことが多いという話は、この協議会で結構出てきたところなので。後ろの次の、協議会の中でというところで捉えられたという形でもよろしければ、そのようにしたいかなと思います。

副 会 長：ありがとうございます。私の頭も整理されたので、今、言っていたところを盛り込んでいただいて、あとは後ろにということですね。

会 長：では、4ページの、参加者は日常的に云々かんぬん、フリートーキングに対するニーズは高いことがうかがえる。ここ改行なしで、そのまま続けて、今年度、市内云々かんぬん、地域に広がりを見せている。ここで段落を改行して、他方ということで、育児に関心が向きにくい父親等について、あるいは、家庭内外で孤立化しやすい状況に応じた支援が十分展開できていない、そういった趣旨の文言を入れるというところで押さえておきたいかなと思います。

それでは、ほかにかがででしょうか。よろしいでしょうか。

委 員：協議会において上がってきた議題の⑤の一番最後、「家事育児の主導権を持つ妻の期待に沿わず責められる」と、ちょっと表現がきついかと思いますので、

期待に沿わなかったから責められるってどんな鬼嫁だなと思ってしまうので、もうちょっとマイルドな感じに。

事務局：何をやっても怒られると書いていたので、和らげてみたのですけれども、もうちょっと考えてみます。

委員：どうですかね。これでマイルドですか。

委員：これ真実じゃないの。

副会長：確かに、読んだときのインパクトありますよね。

委員：口頭で言うのと文になっているのと受け止め方が違うので。

委員：前は怒られるという文章だったけれども、今回責められるに変わった。

会長：前は括弧づきで怒られるか何かだったのですよね。

事務局：そうです。何をやっても怒られる、母親に、妻にという感じだったのですね。

副会長：どう書きますかね。

事務局：表現を工夫してみたいですけれども。かなり厳しくなっていましたでしょうか。

考えてみます。責められると書かなくても、もしかしたら、頑張りたいと思っているのに、期待されているところまでうまくできないみたいなことを書きたかったのですけれども、それで悩んでいる人は実際でも、ここでも出ていましたけど、相談でもよく聞く言葉かなと思っていました。

委員：責められるように感じるとか。妻側責めがあるかどうか分からないので、一旦そういう感じで。

委員：責められるを消して、沿うことができないとか。男性だけの、父親だけの。

事務局：意外とそれで悩んでいる人も多いのかなと思って、頑張りたいし、頑張っているのだけれども、感謝されるよりはそうじゃない反応にがっかりしてしまったり。

委員：期待に沿えなくて、何か言われるのが夫婦関係の問題なのですよ。だから、何か入れたほうがいいのですよ、沿えないだけではなくて。

会長：主導権を持つ妻の期待とずれが生じ、悩みを抱えるにしましょうか。

副会長：恐らく、家事育児の主導権を持つ妻という事態が、家事育児の主導権はなぜ妻が持つのだという。多分、今のパートナーシップだとそこを考えていかなければいけないのかなと思うので、結構限定されているので、主導権は妻が持っている。これは、もう少し二人で育児を。育児の主導権を二人で担うにはどうしたらいいかみたいなほうがいいのかないかなと思いました。

委員：責められるという言葉はきついのですけれども、でも、女性側として、男性が攻められると感じているのだなというのは……。

委員：セクハラとかパワハラとかと一緒に、責められていると思うのですよ、声が裏返っているよという。

委員：後で発言しようと思ったのですけれども、社会的課題と家庭の課題と子どもの課題と地域の課題、4つ出してくださっているのですが、対策のほうに家庭に関する対策がすごく少なくて、ブレインストーミングでいっぱい出したときに、たしか一番出ていたのは夫婦関係だったのですね。だけど、それに対する対策というのがここにあまり載っていないので、そこをもうちょっと、すごくデリケートな問題なのかなと思うのですが、会長がおっしゃったように、父親側だけに働きかけてもうまくいかないから、そこは妻側も巻き込んで一緒に、男性はこういうもの、男性と女性で区別できない部分もあるけれども、やっぱり性別学的な違いとかあるので、妻側への男性理解というの、後々対策のほうに入れていってもいいのかなと考えていたので、ここはちょっと言葉が強いかもしれないのですが、責められると感じている方が多いのだったら、責められると感じているとちゃんと入れてもいいのかなと、あまり隠さなくてもいいのかなと思ったのですが。

委員：責められると感じているかにしたほうがいいですかね。

委員：そう感じているのが事実なのであれば、それでもいいのかなと思うのですけれども。

副会長：趣旨をずらさず言い方を変えるとすれば、日常的に、家事育児を主に妻が行っている場合、父親の育児の方法等が妻側の期待に沿わず、妻から非難を向けられることがあるとか。内容的には同じなのですが、そんな感じで書くというのもあるかもしれない。

会長：こういうケースだけではないけれども、そういうケースが多々見られるということですね、現状としては。少しそういうケースがあるよということで、一般化して言い切らないような表現でまとめさせていただければと思います。さっき副会長がおっしゃられたように、書き換えでよろしいかなと思いますが、いかがでしょうか。よろしいですか。ありがとうございます。

そのほか、いかがでしょうか。よろしいですか。それでは、次に行きたいと思います。また思い出したりしたら、言ってください。

6ページ(3)対象とする父親についてということで、ア、子育てへの関わり度合いについて。

父親支援は、対象である父親の子育てへの関心や関わり方の度合いによってそれぞれ異なる取組内容でアプローチする必要があると考えるが、父親といっても置かれている立場は人それぞれであるため、対象を分類するというのに難しさを感じつつ、ここで①子育てに関心が向きにくくあまり関わっていない方、②関心はややあるがどうしてもよく分からない方、③関心もあり地域とのつながりにも意欲的な方の3つに分けて考えることとした。

①子育てに関心が向きにくくあまり関わっていない方。



この層には、職場の理解が得られなかったり、多忙により関わるのが物理的に難しい場合もある。子育てを母親だけでなく家族、地域で行うということについて社会全体の関心や理解を増やし、子育て環境を改善していくことも必要であろう。

まずは、市内親子ひろば事業等で、家族（夫婦と子）みんなで楽しめるイベント等を行い、地域の子育て支援の場所や雰囲気慣れてもらうような機会を増やし、徐々に情報提供したり父親だけで参加できる場を増やすことなどが良いのではないかと。

②関心はややあるがどうしても分からない方。

上記同様、親子ひろば事業等において、家族（夫婦と子）みんなで楽しめる場に参加してもらうことで少しずつ関心を高め、情報収集や場に慣れることができるだろう。また、父親自身が子育てに関する具体的な知識やスキルを得られる場の提供があるとよい。父親が活躍できる場面の設定（体を使った大きな遊びなど）もよい。「パパトーク」など父親だけで話せる場では、自分自身の悩みや家族との関係などについて話す場にもなる。先行く先輩の話聞くだけではなく、月齢の低い子を持つ仲間同士で助言し合うことは相互的に助言する側の自信にもつながり、その後より積極的な育児参加につながるのではないだろうか。

③関心もあり地域とのつながりにも意欲的な方。

「パパトーク」などに一緒に参加してもらい、中心的役割を果たし、ゆくゆくは地域で主導的役割として活躍してもらいたい。関心はややあるがどうしても分からない方を誘って一緒に参加してもらい、その中で地域の子育てを含む様々なイベントや支援に関する情報の集め方なども周知できると良いのではないだろうか。

父親といっても、子育てへの考え方、立ち位置によって違いがある。個々の子育ての困難度合いに応じたきめ細やかな支援も必要である。現在、親子ひろば事業などにおいて、子育て中の方向けの講座等を実施している。こうした状況を踏まえ、市区町村における子どもとその家庭及び妊産婦等からの相談に応じ、必要な支援に係る業務を行う機関である子ども家庭支援センターにて実施する父親支援の取組は、地域とつながりが少ない層を対象として、地域とのつながりやきっかけづくりになる取組を進めていくことが望まれる。

ということで、ここで1回切りましょう。

まず、この関わり度合いで、どういうふうに分けるかというのは悩ましいところではあるけれども、少し区分をしてみましたというところですね。なかなか子育てに関わりづらい層、関心はあるけれどもどうしても分からない、そして、積極的にやろうという、3つの層、グラデーションでということになります。皆様のご意見等ございましたらよろしくお願いいたします。

副会長：先ほど村松委員が言っていた、子育て不慣れな父親に対する家族の理解を促すみたいなのは、この②辺りに入ってくるのですかね。

委員：全体の構成として、対象者と対策を書き込んでいると思うのですが、この対策もここに書き込んでいく。対象者ごとに対策を変える。

副会長：7ページの作りからは、分類と中身も書いてあるというような理解ですかね。対策も。

委員：どこですか。

副会長：今、読んだ(3)の、対象とする父親についてという表題ではあるけれども、委員言ってくださったように、ここの中に実質対策も含まれている中身にはなっているかなと思っています、現状のこの案は。ここに対策もそのままより入れていくか、または、ちょっと分類した後に対策を項分けするのかなという形式面の話もあるかもしれない。

委員：夫婦との関係、母親と父親がどう家庭内でうまくやっていくためにはという思念を入れるとしたら、全てに当てはまるので、どこに。

副会長：そうすると、後の8ページの(4)の総体としての父親支援の対策みたいなどころに、特に父親分類に関わらない、そういう視点での意見を入れていくという。

委員：もしくは、みんなで楽しめるイベント等を行いということに、例えば講座という言葉、楽しめるイベントだけじゃなくて、例えば両親学級とかだったら夫婦一緒に来るのが当たり前という話が協議の中で出ていたのですが、その流れで、夫婦で一緒に行ける子育て講座があるといいのかなと思ったのです。そういう話も出ていたと思うのですが、そういう具体策をどこに入れたらいいのかなと。

あと、議事録をちょっともう1回見直してみたりもしたのですが、委員が言っていました、あまり関心のない人には、食事を取れたりとか、メリットみたいなものがあるといいとおっしゃっていたと思うのですが、楽しめるイベントだけでいいのか、具体的にもっと食事などのメリットがあるとか入れたほうがいいのか、どの程度踏み込んで書いたらいいのかなと。具体的なほうがよければそういうのも入れていいのかなと思いました。

委員：そもそもの質問なのですが、今のこれは対策も含まれている、この中に。

会長：ざっくりとした対策が入っていて、最後にもう1回、8ページ、9ページ、この(4)でもう1回入る、そういう格好になっているかなと思います。ここでそれなりに書いているのが今の格好ですかね。

委員：私の思っていたイメージとしては、この3種類の父親たちの中で、それぞれ併せてこの人たちにはこういうことをやっという、この人たちにはこういうことをやっというということが目標値なのかなと思っていたのですが、

会 長：もう少しここに具体的な策を入れたほうがよいというご意見ですかね。

委 員：そうですね。

委 員：これちょっと読ませていただいて、この3つのタイプの父親に対するアプローチの仕方というのが、方向性としては全く一緒のように思えるのですね。前、校区ごとに親子ひろばが設置されていてという話などもありましたし、それが保育所とか小学校に上がっても続く地域づくりの継続性という、そこがすぽっと抜け落ちているなという気がします。

それから、関心のない方、あるいは関わってこなかった方へどうやってアプローチするかという視点がないのかなというのがあるのですね。あくまで親子ひろば事業で、パパトーキングをやっています、来てくださいね、多分そういうことなのだろうと思うのです。それを関心を持ってもらって、慣れてもらって、情報提供して、関心が出てきた場合には、子家センでやられるパパトーキングに参加してもらって、やがて中核を担ってもらう。そうした地域づくりをしていくのだ、多分そんなシナリオなのかなと思うのです、あまりこの3つ、変わった書き方になっていないので、やや具体性に欠けるのかなという気はしているのですよね。

副 会 長：先ほどご意見出たように、なるべく具体的なものにしたいなという思いは私の中でもあって、具体的な取組のアイデアなんかはなるべく網羅して入れたらいいと思っていて、その並べ方とか、父親の分類みたいなものごとの書きぶりにするのか、大きな枠の中で、特にということでこういう分類に触れていきながら書いていくのか、そういう方向性もあるかもしれないですね。どっちが分かりやすいかということ。こちらが考えたことが伝わりやすいかと、そういう視点で考えればいいと思っていて。

会 長：①の層については、できるだけ多く接点を持っていこうと、こういうのが主かなと。②については、その接点をもって、それを後押ししていく、歯車を回していけるようなイメージ。③は、それをさらに独自で動いてもらえるような基盤整理みたいなところかなと思います。ざっくりとしたイメージとしては、なので、そのイメージを具体的に行動でというところでいくと、②のところで広報が入っていましたかね。違いましたか。9ページのところでインターネット等の広報手段というのがありますけれども、それ以外の広く関わり接点を設けていくというところでは、現状、子ども家庭支援センターとして機能させることができる事業としては親子ひろばというところで、事業名としては親子ひろばが出てきているのだろうなと思いますけど、それ以外にもっと広くというところかなと思いますが、これ、事務局、何かやりようありますか。広く接点を設ける親子ひろば事業以外で。

事 務 局：ここで出ていた話で、両親学級の話が出ていたかと思います。生まれる前で、両親学級は初産の方が来るので、子どもがまだいないご家庭というか、夫婦だ

けで来ると。そこは割と二人で来るのですよねという話があって、その後はどうしても、育休とかでお母さんだけが現れる場面が割と多いというお話も出ていたと思います。その両親学級の中で、少し夫婦関係とか、生まれてからどんな生活になるかというイメージづくりとか、そういうのをプレパパグループ、プレママグループに分けてやったりという事業の紹介はちょっとさせていただいたりしていたと思うので、そういったことも、少しここの親子ひろばだけじゃない、ほかの事業の活用には、そこの活用というのも案としては頂いていたかなと思うので、入れようかと思ったのですけれども、今現時点で別の課の事業だったので「等」にくくってしまったというのがあります。

ただ、後で出てくるのですが、次年度組織改正をして、母子保健事業が子育て相談室に入ってくるので、この答申を受けて、一体的にはできるかなと担当レベルでは考えていたのですが、文章の中には入れなかったというのがあります。

広報の工夫もいろいろご提案いただいていたかなと思っていて、特にSNSだとかそういったものの活用が、皆さんすぐスマホで調べるといってお話なんかもあったので、そこは意識しているのですけれども、これもインターネット等にまとめてしまったので、少しぼんやりしてしまったのかなと今、聞いていて思いました。

あと、先ほど校区の話とかも、子どもの年齢のところで、就学移行期のところに意識しては書いていたのですけれども、言葉としては漏れていたもので、そこは足していけるかなと、今の意見をお聞きしながら思っていたところです。

会 長：母子保健事業の連携という言葉は入れづらいですか。

事 務 局：それは入れられます。外部事業ではなくて、母子保健とか。あとは、今、聞きながら感じていたのは、夫婦関係のことで、人権平和課さんのほうで、男女平等推進センターで事業を持っていて、実際そこでお父さんというか、夫の性別役割のところでの悩みに対する講座をたしか、タイトルは忘れてしまったのですけど、今年度やっていたのですよね。そういったことともここの答申を共有することで、うちでやるのか、向こうでやるのかは別にしても、市としては何かできるのかなとお聞きしながら思いましたので、母子保健事業その他市の、別に子家センに限らず、市の事業においてそういったことを意識して、あるいはこの情報を提供して、連携しながら取り組むということではできることだなと感じています。

会 長：であるならば、6ページの2段落目のところ、「まずは」というところで、親子ひろば事業等というところに行く前に、時系列で並べると母子保健のほうが先に来るとお思いますので、母子保健事業との連携を含めて、子育て支援事業と接点を持てるように取り組んでいく、なお、校区単位でひろば事業は行っているのでしたか。

事務局：市内は12か所です。

会長：12か所。別に校区は関係ない。

事務局：一応、小学校区でくくっているわけではないのですが、自宅から徒歩10分、15分圏内で行ける場所に12か所。なので、市全域にするために12か所置いています。

会長：地域で実施している親子ひろば事業等で楽しめるようなイベント等を行うと、こういうことで接点を増やし、そして、つながりを持っていくところかなと思います。

この家族（夫婦と子）と書くと、何かモデル家族みたいなのところがあって私はあまり好きじゃないのですけれども、家族・親子とか、そういう表現でいいかなとは思っています。

ということで、①については母子保健との連携を含めて入れるというところでもよろしいですかね。よろしいですか、①のところは。

委員：①の子育てに関心が持ちにくくて、今の時点であまり関わっていない方に関しては、やっぱりイベントを行って来てもらうというのは、これは一緒なんじゃないかなと。関心がない人は、父親宛に何か子育て関係のチラシを送るところからというか、イベントに来てもらうというのは、この2番の段階なのではないのかなと思うのですが、どうでしょうか。

会長：ここにもう少し広報的なものを含めていくというところですかね。

委員：そうですね。まずは認知からという段階なのかなと、1に関しては思うのですけれども。

事務局：今のご意見と一緒に、先ほど、まずはということで、母子保健とのつながりというところでお話があったかと思うのですけれども、その辺りに、連携、つながりをして、まずは理解を深めてというような形で、その後で、認知が深まった段階で親子ひろば等につなげていくみたいな感じの整理にしたほうが、いかがですか。それともちょっと違いますか。

入り口としては母子保健でという話だったと。

委員：連携等を行いというだけになってしまうと、親子ひろば事業にもうお任せみたいな感じになってしまうから、それだともともと関心のない人がそこにたどり着かないはずなので、先ほど事務局がおっしゃったように、母子保健のことも盛り込んでいただいて。でないと、ここを突然ぱつと出されても、親子ひろばをやっているほうとしては、これはあまりにも課題が多い。

会長：丸投げ感があるという感じですか。

委員：丸投げなのかなという。

事務局：ありがとうございます。1個前の段落のところにも、そもそも関われない理由が多分あったりとかして、ご自身のいろいろな生活の環境とかお仕事の状況とか。関心、ここに多忙によりとか物理的にという書き方をしているのですけれども、

そこはもちろん親子ひろばでどうこうできることでもなかったり、もしかすると、子家センがどうこうできることでもないことも入っているのですが。下の3行目に関心や理解を増やしとか、子育ての環境を改善するというところが、一部広報周知も含めて子家センでもできることが入っているかなと思っています。

最後のほうに、男性用のトイレにおむつ替えシートがなかったりとか、授乳室で女性しか入れない場所があるけど、お父さんが本当はミルクを落ち着いてあげたい場合があるみたいな話は、ここでもちょっと出てきたかなと思うので、9ページの真ん中よりちょっと上の辺りに、少し環境整備についてもというところを、子家センが別に作るわけじゃないけれども、それに向けて働きかけをするということで、連携しながらという形で文言を入れています。

なので、ちょっと親子ひろばに全てやらせると読めるのであれば、もうちょっと上の段落を具体的に書くなり、膨らませると、母子保健のところでの連携をもうちょっと何か厚く書くみたいな形。

委員：多分、一番最初の取っかかりというのが母子保健になるのですよね。両親学級があったり、こんにち赤ちゃんの訪問であったり助産師さんだったりというところがスタートで、その先に私たちの親子ひろばを紹介していただいて、それで知ってもらおうとか、プレパパ、プレママで、一緒にそこで連携してもらってひろばを知ってもらおうとかという、まずそこがないと、ある日突然親子ひろばの存在を知るわけがないので、できれば、最初のスタート段階で関係部署の連携をさらに強固にするとか、そういうのを入れていただけるといいかなと思いました。

委員：やっぱり、それってお母さんなのですよね。最初からお母さんばかりになってしまうので。

委員：でも、両親学級とか、プレパパ、プレママもあるから。ただ、こんにち赤ちゃんのときは、お母さん対象で来ていただくのですけれども。そのときに、もう少し連携があれば、その先が、こういうところがあって、パパトーキングとかもありますよと、パパだけでも参加できるものもやっているし、親子ひろばだったら家族で来られるようなイベントもやっているし、通常のひろばで、普通のと看にどうぞいらしてくださいみたいなものにつながっていったら、もっと選択肢。イベントがあるから行けるという人もいらっしやれば、そうでなくても、平日休み取ってくるという方もたくさん出てきているので。イベントありきと言われても。

事務局：じゃあ、ここの①の部分は、もっと情報がうまく伝わるような工夫をもうちょっとして行って、それで、来たというのはもう②のほうに書くという形でやってみたいと思いますが、いかがでしょうか。

- 委員：6ページの下から4行目、まずは市内親子ひろば事業等で、まず来てもらう。でも、忙しいから、来られないから、まず来ることができないのですよね。でしたら、まずしなければいけないことは、来なくても家で子どもと関われる方法を発信するだったりとか、来る以前の、家でまず子どもへの関心に向けてもらうことができるような取組は何かできないかなと思いました。例えば本当に出勤前の隙間時間で子どもとできるスキンシップだったりとか、そういうアイデアをツイッターとかで発信していったら、子家センいいな。じゃあ、いつか暇ができたら行ってみるかみたいな意識につながっていったりしないですかね。足を運ぶって、やっぱり子ども連れて出かけるのって、準備して、荷物持って、出かけるのは大分大仕事じゃないですか、小さな子連れていくのは。それを忙しい人にしろというのはかなりハードルが高いので、じゃあ、本当に小さなことから、スモールステップで行くのはどうなのかなと思いました。
- 委員：生まれる前からの、健康推進課でも母子保健関係ともっと連携を強くするとか、そこを盛り込んでもらえたほうが、関心がない人には響くかもしれない。
- 会長：ナビアプリは、子家で情報提供とか発信はできる。
- 事務局：できます。
- 会長：母子包括も投稿できたりする。
- 事務局：やれます。
- 会長：そこ連携しながら、家庭内での子育て知恵袋。昔は知恵袋がありましたけれども、今は何て言うのですか。昔、知恵袋はありましたよね。
- 委員：ありました。
- 会長：今だったらQ&Aとかになるのかな。
- 事務局：そうしましたら、①のまずはのところは、母子保健との連携と、あとは、来なくても、家でも子どもに関心が向けられるような取組についての情報発信を強化して行ってほしいというところで、ここはまとめさせていただいて、親子ひろば以降の部分については②以降に流していくという形でよろしいでしょうか。大丈夫でしょうか。
- 委員：今、子家センのツイッターを見ているのですがけれども、親子ひろばからのご案内みたいなものがほぼほぼで、子どもに関する、子育てに関する情報は書いてあるけど、実際はそれがないなど、すごくもったいないなと思いました、ツールとして。子どもとこんなふうに遊んだらいいよみたいなのをちょこちょこ、2、3日に一遍ぐらい繰り返していったら、いつかバズる日が来るかもしれない。これいいみたいな。子育て、バズりやすいですね。
- 会長：そこを子家だけでやるのではなくて、各ひろばさんに協力してもらって、アイデア出してもらおうとか。
- 事務局：余談ですが、近々、市では、いろいろな課が持っているツイッターのアカウントをカテゴリーごとに集約することになりました。今後、「子ども・教育」とい

う形で統合していきますので、そこら辺がもっと分かりやすくなるようにしたいと考えています。ありがとうございます。

会 長：では、確認をさせていただきます。①のところは、1段落目はともかくとして、2段落目、まずはというところで、母子保健との連携、そして、なかなか外出をしてイベント等に参加できないけれども、情報配信を強化しながら子育て支援をしていくと、親子の関わりを作れるような情報配信の強化をしていくとよいのではないかとということで書かせていただいて、②のところ、親子ひろば事業に参加をしていただくところですかね。②③についてはいかがでしょうか。

副 会 長：②になるのかな。先ほど委員が言っていた、夫婦一緒の子育て講座みたいな、ちょっとそこが入っているような感じではあるのですが、少し明示したものを入りたいなと思っていて。みんなで楽しめる場の参加のみならずという感じですかね。夫婦一緒に。父親自身が子育てに関する具体的な知識やスキルを得られる場の提供があるとよいが、夫婦がともに参加できる機会になるようにと入れていただくのがいいかなと思います。

委 員：関心がある方なので、楽しめる場プラス理解を深めるための講座という文言も入っていいのかなと思います。課題のところに書いてあった、母がいいと言われる寂しさ、夫婦関係ということで、ほかの課で講座とかやってくださっているということなのですが、子ども家庭支援センターでもやっていただくと、子どもも連れてきやすいのでいいかなと思います。

私、個人的に、尾木ママ、尾木直樹先生の子育て講座に行ったことがあるのですが、そのときに、男の人も女の人も脳がもともと違うみたいな話があって、女の人は、個人差はもちろんあると思うのですが、赤ちゃんが泣いたときに、ただ泣いているだけじゃなくて、プラス何かしなきゃという部分が働くけれども、男性は、最初はただ泣いているところしか働かなくて、何かしなきゃというのが働かないのだよと言われて、でも、育児を頑張って2か月ぐらい続けていたら女性のように何かしなきゃという脳も働くようになるのだよ。お母さんたち、子どもを生んで赤ちゃんが泣いて、パパが何もしないからってそんな人と思わなかったと、すぐ離婚しないでねみたいな話があったのです。2か月は待ってあげてねと。そういう女性側にとっても、男性とそういう違いがあるのだというのを分かっていると、ちょっと広い心というか、うまくいく場合もあるのかなと思うので、女性側へのアプローチというのも大切なのかなと、そういう経験がありました。相互理解のための講座というのは大事なのかなと思いました。

委 員：今の話じゃないですが、そうやって脳が違うから男性は何か月かかかりますよというのはよく分かるけど、女性だって妊娠したら途端に母性が発達して、子どもがみんな大好きって、そんな人いないから、女性だって時間をかけ



てなるので一緒に行くべきで。男の人は脳が違うから仕方ないでしょうと言われても。

委員：やっぱり相互理解。

委員：相互理解のそういうのを一緒に、発達なり、そういう遊びなりのことを一緒に学んで、一緒に親になっていく、そこが欠けてしまうとあれかなと。今のお話より、一緒にやる講座みたいなのをに入れていただくと。

委員：女性はホルモンバランスの変化とか結構聞く機会はあるのですがけれども、男性側のことを学ぶ機会ってあまりないなと思ったので、両方あるといいのかなと思います。

委員：そんな話しましたか。

委員：日々、進化中です。もう3年になりますけれども。

委員：でも、ママも一緒ですよ。

委員：そうですね。どうですか。

委員：気が利かないみたいなのは暗に言われて。

委員：責められる。

委員：責められるわけじゃないですけど。気が利かなかつたなみたいなのは確かにあるので。具体的にはあまり覚えてないですけど。

副会長：さっき、せっかく協議会で上がってきた課題でいろいろと出ているので、やっぱりここに応えるような対策を書くべきだと思って。今言われたようなところについて、育児に不慣れな父親が感じている育児の不安や孤立について、家庭内で相互理解を深めるための講座等の機会を創出すべきであるみたいな、そんな応え方もあっていいかもしれない。

委員：あと、この夫婦と子というのは消えるのでしたっけ。

事務局：消えます。

会長：消していただくほうがいいかなと思います。

事務局：どっちの表現がいいのかと。括弧で残っているのとどっちの表現がいいのかなという感じで残しているものになりますので。

会長：家族でいいと思います。うちの市の保育所の入所の申込手続に、あらかじめ父が上に書かれて、母が下に書かれていて、何なのだろうと思って、市で順位を決められているようで非常に歯がゆい思いをしているので、ぜひそういうことはあまり。こういう家族像みたいなのはあらかじめ示さないほうがいいかなと思います。

では、相互理解ができるワークショップについては。

副会長：「スキルを得られる場の提供があるとよい」の後ぐらいですかね。

会長：そうですね。父親自身が子育てに関する具体的な知識やスキルを得られる場の提供があるとよい。また、夫婦間相互理解が深まるワークショップ等の企画が

あるとよい、かな。よい、よいが1、2、3と続きますけれども。でも、入れるとしたら、ここが妥当なところかなと思います。ありがとうございます。

②についてはいかがですか。そこを入れさせていただくということ。よろしければ、③。

委員：②の最後の段落の月齢の低い子を持つ仲間同士で助言し合うことは相互的に助言する側の自信にもつながりと、月齢の低い子同士もあるのですけれども、先輩パパから後輩パパというのも自信につながるので、低い子同士だけじゃなくてもいいかなと思いました。

事務局：月齢の低い子を持つじゃなくて、逆に仲間同士だけのほうがいいでしょうか。先行く先輩の話聞くだけではなく、仲間同士で。

委員：先輩はこっちに入っているんですね、すみません。

会長：話す場にもなる。先輩や仲間同士で話し合うことは相互に助言する側の自信にもつながりということで、シンプルにしてしまえば、先輩、そして仲間同士でと。

そのほか、いかがでしょうか。では、7ページはよろしいですか。ありがとうございます。

委員：内容には関係ないのですが、親子ひろば事業などにおいてというところの「など」が、漢字のところと平仮名表記のところがあって、どっちかに一本化したほうがいいのかなど。

会長：ありがとうございます。

では、8ページの。

委員：③は、関心もあり地域とのつながりにも意欲的な人にほぼほぼ頑張っている感じになっているのですけれども、それでいいのですか。

会長：頑張りを応援する何かしてほしいという感じですか。

委員：関心ない方、分からない方を誘って一緒に参加してもらって、その人を連れてきてとなっていないのかなと思って。

会長：頑張っている人に頼りすぎだということも。

副会長：確かに意欲的な方への支援ではないですね。そこは確かに。

会長：意欲的な方に期待することみたいな感じ。

委員：市の役割としては、意欲的な、頑張っている人を支えるというのもやっぱり必要かなと思うのですよね。

委員：意欲的だけでも、いつかぼっきり折れてしまったりとか。

委員：いろいろ事情によって参加できなくなったり。

委員：いつ何が起こるか分からないですね。

副会長：さっき言われた、校区ごとというか、地域の個別のつながりの中でという、そうすると、仲間も増え、継続的に自身も子育てをやっていけるということも

あるので、その辺りをここに盛り込んでもいいかもしれないです。ここだけには限らない話ではあるけれども。

委員：地域で主導的役割とあるのですけれども、地域って国分寺市全体をいつているのか、子家センを部隊にした活動なのか、それとも、そういう地域的なつながりができたというか、独立したそういう仲間なのか、よく分からないですけど、その辺がよく分からないです。当然ながらパトローキングというのがあるので、子家センに連れてきてもらって、ここが主催する事業に皆さん連れてきてねということだろうと思うのです。

さっき私が申し上げた、地域のつながりというのは非常に大事だと思っていて、小学校のときに、お互い忙しいけれども、土日に3人の子ども、東京ドームに行ったりとかしてくれる親もいましたし、鉄道博物館に連れていったりとか、そういうお互いに面倒見合うというか、そういうのは本当に近いところにいるからできると思うので。今はそれが、高齢者の会になりつつあるのですが。地域に根づくとはどういうことなのかなと。子どもの、子育てから始まる地域のつながり、父親同士のつながり、あるいは家族同士のつながりと思って考えた場合に、そういう視点があってもいいのかなと思います。

3番の一番曖昧なのは、「地域で主導的役割」というのは具体的に何を指しているのかなと、ちょっとよく分からなかったです。何かお困りごとがあるときと考えると、もっと認定してもいいのかな。

委員：③の対象の方というのは、恐らく悩みとかもあるのではないかなと思うのですね。例えば、子どもが成長するにしたがって新しい悩みが出てくると思うのですけれども、そういったことに対して、悩みを相談する場を提供するとか、そういった方向の、ちょっと具体的にぱっとはうまく言えないのですが、そういった支援がこの③の人たちには必要なのかなと。

会長：③のイメージは、恐らく父親同士のサークルを自主的に動かしていくような、そういうイメージだと思います。それをやって、できたね、頑張れと応援するだけではなくて、恐らく子育てひろばで円卓会議か何かなかったでしたか。ああいう感じの、地域活動をやっている人たちの困りごとを聞いていくようなものですかね。最近新しい人が入ってこないとか。そういう地域活動をしていく中での困りごとの相談、あるいは、サークル同士のつながりを作っていくような役割。

そもそも諮問が地域組織化事業なので、子家が全部担うというよりも、地域の父親同士が動けるような場を作っていく。できればこの③の人たちを増やして、地域でのつながりを作っていきたい。でも、今のところ作ったら丸投げになっているよというご指摘なので、組織化後の相談、あるいは、サークル間のつながりのハブ的な役割を子家が担うとよいのではないかというイメージかなと思いますが、そういうイメージでしょうか。

- 委員：それをすることに喜びを見いだせる人だったらいいのですけれども。
- 副会長：そこの視点と、どちらかというと、その人自身の支援という部分では、子育てに関わる父親支援として、言われたままなのですからけれども、子どもの成長により変化していく子育ての悩みを継続的に相談し合えるつながりを維持できるよう云々。最後だけ、一番大事なところがないのですけれども。
- 事務局：もう一度お願いできませんか。
- 副会長：子どもの成長に伴い変化する子育ての悩みを継続的に相談し合える仲間、つながりを維持できるよう云々。
- 会長：それは多分、イのほうで書いたほうが、年齢移行のところがあるので。
- 委員：主導的役割として活躍してもらいたいとその人がやることなので、活躍するための支援を、活躍するための例えば場の提供だったりとか、学区ごとという話だったので、前回お伝えした青少年育成委員会というのが中学校区ごとにあって、結構アウトドアとか、お父さんが活躍できるような活動をされているので、そういったところにサークルを作るのも1つだけれども、そういうところにつなげていくというのもまた1つかなと思うので、場の提供というのが言葉としてあっているのか。つなげる。意欲的な方への支援としてはあるのかなと思います。
- 委員：あとは、意欲的な方イコール悩みがない方ではない気がして、自分が悩んでいることの答えを求めている方もいると思うので、それこそ課を越えた講座とか。子育てひろばには来ているけれども、男女参画何とかのほうは知らないから分からないではなくて、そっちにはこういう講座があるよとか、そういうのを周知したら、意欲的な方は悩みの解決を求めているところに行けたりするのかと思うので。課を越えた講座の紹介みたいなものもあつたらいいのかなと思いました。
- ③の人の負担がどんどん増えていってしまって、その人も子育て中で忙しいし、悩みもあると思うので、何か支援があつたらいいのかなと。
- 委員：パトリーキングをここでやるのではなくて、どこかお店でやったりとかできないかなと思って。主導的な役割として、メンバーを取りまとめるみたいなのではなくて、近所の。地域は何なのかと、さっきお話にもあつたのですけれども、お店はすごく地域だと思うのです。好きなお店を舞台にパトリーキングして、別にそのサークルをどうこうするつもりじゃないけれども、お店が好きだからお店に通って行って、お店で顔見知りになってというか、お店の方は絶対にいらっしゃるから、少なくともしゃべり相手はいるみたいな、そういう形のほうが。そこに場を提供するというさっきの言葉としてもいいような、現実味があるのかなという気はしました。集まろうよじゃなくて、あそこに行ったら会つたのだよねということにつながるのではないかなと。

委員：同じようなことを言っていたのですけれども、うちの夫、関心もあって、意欲もあるのですが、子どもの年齢が上がるにつれて、子ども家庭支援センターに行きにくくなって、じゃあ次にどこに行ったらいいのかなと思ったときに、何かイベントがあると、もともとパパトーキングで知り合った人を誘って行きやすいけれども、そのイベントが分からないから、きっかけがないと誘いづらいなという話を言っていました。

事務局：そうすると、一番下のところに、地域の子育てを含むイベントの支援に関する情報の集め方も周知というのが書いてあるのですけれども、それだけではなくて、意欲がある方が集いやすい場を作るのか、もともとあるところを紹介するのかとかいろいろあると思うのですが、場の提供であったり、情報提供であったり、次につながることをうまくつなげてあげるということを少し書き入れられるといいでしょうか。

副会長：そうですね。集いやすいというのが。

事務局：行きたいという気持ちはあるので、それをちゃんと拾えるというか。その前の、ハブ的な役割という組織化、もし行って集まりになったとしたら、それが続くお手伝いももしかしたら必要なのだと思うのですけれども、その中の1つに集まる場所とか、年齢が上がったらどうなるかとか、小学校に上がるとういうのがあるよという情報提供だったりとか、そういうこともお伝えする。あるいは、もしかしたら、地域のお店とかと子ども家庭支援センターとかでお話ができ、そういうところでも何かできたりすると、その後も続いていくのかもしれないので、ちょっと具体的にはできるかどうか分からないですけど、そういった場を何か作るお手伝いとか、今あるもの、青少年の育成委員会、地区ごとに今やっているものがあるので、デイキャンプとかやっていたりするものを少し、小学校上がる前に人に、上がるとこんなものがあるのだよとか、そういうことがどうしても就学前のお子さんというか、幼稚園行く前ぐらいの方が多いのですけれども、ちょっと先の情報も提供して行って、行きにくくなって終わってしまったではないものにつなげられるようなことを。すみません、文章になっていないのですけれども、書きたいと思います。

会長：であれば、③については、前段で、パパトーキングなど関心のある人が集えるような場の紹介や提供等をするというのがまず1つ目にあって、その後に、独自で活動できるようなサポートをしていく。プラス、グループ間の情報共有等にも役割を果たすとよいのではないかという、三段区分で書いていただくというのではいかがでしょうか。流れとしてはそうかなと思います。よろしいでしょうか、事務局。ちょっと文言については今、ぱっと出てこないもので、申し訳ありません。

それでは、8ページに行ってよろしいでしょうか。では、8ページです。残りの時間もあつという間に来てしまいました。

イです。子どもの年齢についてということで、子育てに関する悩みは、子どもの年齢に限らず、どの年代でも生じることである。しかしながら、子育てに関する不安や負担感、孤立を感じやすいのは、子どもが1歳になるまでの間が最も多いと言われている。また、1歳から就学前までの子どもの心身の成長は目を見張るものがあり、人格の基盤の形成する大切な時期であるため、子どもに関わる全ての大人の果たす役割は大きい。また、小学校就学を境に、それまで利用してきた就学前限定の子育て支援事業の利用が終了したり、学齢期ならではの子育ての悩みも生じてくることから、小学校就学移行期に、母親のみならず父親としても、新たな子育て支援に繋がることも重要である。

こうした状況を踏まえると、子ども家庭支援センターにおいては、特に子育てに不慣れな未就学児童、小学校就学移行期（直後）の父親を中心に対象にすることが、効果的であると考えられる。

ということで、これは年齢区分で、小学校移行期までを対象とするよというところですかね。小学校に移行してしばらくすると、ここはどこが担うのだという気もする。どこか担うところあるのですかね、中学校移行期。教育相談とかそっちになっていくのですか。

事務局：そうですね。相談というところでは教育相談室のほうがやっていますけれども、子育ての支援の中では、例えば児童館ですとか学童保育所なんかも担っていて、子ども家庭支援センターと共同で行っている円卓会議にはそういったところも参加してくださっています。

会長：子ども家庭支援センターは、年齢を通じて丸抱えをしないというイメージかなと思いますが、教育部局でも、先ほどお話のあった教育相談とか、あるいは、スクールソーシャルワーカーも配置されていると思いますので、そういった生活相談できる部署も増えてくるころかなと思います。

なので、子ども家庭支援センターとしては、母子保健と連携しながら、就学前、特に1歳児期から小学校移行期、1年生ぐらいまでかなというところを対象としたいというところがございます。ここについてご質問等は、あるいはご意見はいかがでしょうか。

委員：さっきの議論に出てきたのですけれども、学区ごとの支援というのはここに追記して。

事務局：ここで、中心にという形で、特にとあえて書かせていただいているので、その後の人たちも来ていただいても構わないのだけれども、やっぱりアプローチをしていくところがそこを中心やっていこうかなという意味合いでこのような表現なのですが、利用できないということではないということではあるのですが、誤解を招くようであれば、そこは。

校区ごとの、親子ひろばが12あったりとか、その後、小学校に行って、結局またそこで出会っていくという話が出ていた部分を少し触れられるといいかなというお話です。

委員：新たな子育て支援につながることも重要とあるのですけれども、そのつなげ方ももうちょっと、どういうふうにつなげられるのか。

事務局：さっきも出ていたのですけれども、少し校区を意識した情報提供だったりとかはできるのかなと思います。あとは、それこそ、親子ひろばさんともそこは協力する必要があるあって、校区ごとのひろばさんで、その後、小学校に入るとどういふふうになるのかという情報をそこと共有することで、ひろばに来ている方に少し先の情報を提供してもらうことが可能になるのかなと思いました。

会長：それは、就学移行した後というよりも、移行する、いわゆる年長段階で、学童とか放課後子ども教室とか児童館とか、そういう地域の情報がなかなか得られないというところで、そういう将来というか、小学校に就学した後の生活が見通せるような子育て支援、どういうものがあるのかというのを知りたいというのが多分議論であったかなと思います。そこが就学前から就学後の子育て支援（児童館とか学童等）につながるような情報提供を含めた支援が重要であるとか、そういう書き方をさせていただくとよろしいかなと思います。それに学童とか児童館はエリアが設定されていますので、いわゆる校区とか関わりがあるかなと思います。

そのほか、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。ありがとうございます。

では、進みまして、（4）子ども家庭支援センターが担う父親支援について。

子ども家庭支援センターで実施する父親支援の取組は、家庭内にとどまりがちな子育てに対する不安や悩みの解決の糸口を見つけることができるとともに、さまざまな支援を使いながら子育てをしていくノウハウを獲得でき、子育てに対する自信につながるものであることを望む。

子育てに関する負担感や孤立感の軽減につながった、地域に知り合いができたならこんな良いことがあった、などという経験を積み重ねることで、より積極的に子育てを行う父親が増えていくことにつながる。

また、前項「現在の父親が抱える困難について」で上げたとおり、子育て支援に関する情報が行き届いていない状況にある。本取組を行うに当たっては、広報手段としてインターネット等を活用するなど、父親支援の取組に参加しやすいよう様々な手法を検討しながら、地域で子育てしやすい環境を整えられたい。また、行政の子育て支援施策や地域の子育て支援情報を積極的に広報し、父親の子育てに対する不安の解消を図られたい。

なお、おむつ替えスペースや授乳室等が女性専用しかない施設を多く見受けられるが、父親の育児参加を促進するためには、こうした環境の整備は欠かせ

ない。子どもと子どもを育てる家庭を支援する事業を行う子ども家庭支援センターとしても、関係機関と連携しながら、子育てしやすい環境を整えられたい。

というところでございます。ここでは、これまでの議論の中でありました広報手段としてのインターネット等ということではありますが、Xとか、あるいは「ぶんじ子育てナビ」アプリですとか、ツールが実際に稼働しているものもありますので、そういったことを少し明示しながら、それを活用していくということを書き加えることと、この「なお」のところですね。「図られたい。なお、おむつ替え」のというところで、環境整備に関する子ども家庭支援センターとしての情報発信を含めて書いていくことは可能だということでしたか。そういったところを書き加えるというところで、これまで議論ありましたが、そのほか、いかがでしょうか。

委員：2段落目が地域の組織化に関係するところというか、地域とのつながりの価値みたいなことを書いてあると思うので、ここに具体的に、パパトークを含め、ほかの具体的な活動内容みたいながあると、見たときにこういうことをするのだなと分かりやすい気がしました。

会長：パパトークと、P a p a ' s T a l k T i m e でしたか。

委員：あと、今、意見が出ていた、こういう内容の講座をやるとか、そういうのが最後に一覧になっていると、こういうことやっていくのだなと具体的なイメージがつかめるのかなと。

会長：実績を踏まえてイメージを具体化していくようなところですかね。であれば、1段落目、望む。改行して、2段落目、パパトークやP a p a ' s T a l k T i m e、あるいは各種子育て講座への参加を通じて、つながった、あった、経験を積み重ねることで、より積極的に子育てを行う父親が増えてきている。それをさらに推進されることを望むと。

委員：あと、先ほど話に上がったSNSでの情報発信、子育て情報発信も入れていくと、ただ、それを見ることも子育て支援につながることでいいのかなと。

会長：それは、2段落目に入れますか。それとも3段落目の、また、前項のというところに入れるか。今のところ3段落目の広報手段としてのインターネットではなくて、子育て支援手段としてのネットということですかね。入れるなら、1段落目ですかね。

副会長：ノウハウの獲得ですかね。

会長：ノウハウを獲得でき。望む。そのためのツールとして、既存のナビアプリ、X等を十分に活用することも可能だと思われる。可能だと考える。新しいものを作り出すというよりも、既存のものをもっと十分活用していこうというところでのご意見だったかなと思います。

副会長：これで具体化するなら、育児、子どもへの接し方等の子育て情報をみたいな感じに。



会 長：そうですね。そのほか、いかがでしょうか。

委 員：課題の7番の、支援者は女性が多く相談しづらいとの対策が書かれていないのですけれども、男性サークルと書くとあまりよろしくないのかもしれないですけど、参加しやすい様々な人的環境、社会資源の活用とか、多いですかね。

副 会 長：どこかに入りたいですね。

委 員：たしか女性スタッフももちろん、パパトーカーキングの内容をきっと聞いたりして、いろいろ情報共有されていると思うので、女性スタッフも、男性に来てもらいやすいようなことを知るとか、男性スタッフを増やすことだけが全てではないと思うのですが、男性も来やすいような手法のところにもうちょっと何か欲しい気がしました。

副 会 長：支援者側も多様なジェンダーがいていいということですよ。

委 員：そうですね。

事 務 局：様々な手法とは、いろいろなものがそこに入っているというところで、大きく書いてしまいましたので、具体的にということがあれば、ぜひ具体策をここに入れていただければと思います。

会 長：実際問題、子家の男性女性の職員別は、大体どんなものですか。

事 務 局：今、子ども家庭支援センターの職員が、時間額会計年度を除くと24名なのですけれども、そのうち男性が3人で、この子ども家庭支援センターの親子ひろばのスタッフは女性です。男性の職員は今いないですね。なので、パパトーカーキングのときは、男性職員が入っています。

委 員：4段落目の環境のところにもそれが入るといいかもしれないなと思いました。

委 員：3段落目の参加しやすい様々な手法に入れるか、4段落目の物的環境に並べて人的環境を書くかですね。

会 長：最終段落は、広く環境なので、行政だけではなく、民間を含めた環境整備というところなので、ここに入れてしまうとちょっとあれかなと思います。

副 会 長：そうすると、3段落目の父親支援の取組に参加しやすい様々な手法を検討しながら、地域で云々整えられたいの後ろに、より父親が参加しやすく、相談しやすくなるよう、支援者側も多様なジェンダーの配置をすることが望ましいみたいな感じ、そういう形ですかね。

会 長：そうですね。書くとしたらそうですね。そのほか、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、9ページの2に行きます。子どもの健やかな成長のためにということ。令和5年4月に子ども家庭庁が発足し、母子保健とのさらなる連携強化に向けた取組が行われており、子どもが健やかに成長できる社会、子育て家庭が地域から孤立しないような環境の整備が多角的に行われている。

しかしながら、子どもを取り巻く現状をみると、子どもへの虐待は増え続けており、令和5年9月に子ども家庭庁が発表した令和4年度の児童相談所

の虐待相談件数（速報値）は前年度より 5.5%増、過去最多を更新している。東京都においても同様の傾向となっているとともに、その内容も年々深刻化している。

子どもの虐待が起こる家庭は、子育てに関する不安などが家庭内にとどまり、地域から孤立していることが多いといわれている。

こうした状況を踏まえると、地域から孤立せずに子育てができる環境の整備、子育て家庭が地域とのつながるための取組は、さらに推進していく必要があると考える。

子どもの健やかな成長を地域で支えるため、地域の社会資源の開拓、育成等を行い、子育て家庭を支える支援体制の強化につなげられたい。

というところでございます。ここは子ども家庭支援センターがそもそもどういう機関かというところを押さえながら、この取組にどういうスタンスで臨むのかというところを書かせていただいているところでございます。そのためにちょっと、やや虐待の表記の仕方が突飛に入ってきますけれども、最終はそこがターゲットになる。でも、そこをできるだけ出さないように、最終段階で持ってきたという格好になっております。子家はこういう役割を担っていますよ。その最後の 1 段落ですね。本諮問については、地域社会資源の開拓、育成等を行うということが今回の諮問に対する子家の役割かなというところで最後押さえている格好になっておりますが、9 ページ、10 ページについてご意見等ございますでしょうか。よろしいでしょうか。ありがとうございます。

以上、ざっと見てきましたけれども、ちょっと文言がぱっと出てこずに、幾つか加筆修正、あるいは組み換えというところがありました。別紙のところを中心に加筆修正をする形かなと思います。

大変申し訳ありませんが、個々の書く内容等についてはご議論いただきましたので、その議事録を踏まえて、会長、副会長で文言を整えて、答申の最終案とさせていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。ありがとうございます。では、事務局含めて、会長、副会長で最終案をまとめて、市長に提出したいと思っております。どうもありがとうございました。

では、議事の 2、「子ども家庭支援センター地域組織化事業における父親支援の取組について」ということで、答申案（素案）を基に議論をしてきましたけれども、今後、一部修正の上、答申としてまとめさせていただきます。どうもありがとうございました。

それでは、そのほかについてということで、（1）（2）、お手元の資料 20、21 がありますが、まず事務局からお願いいたします。

事務局：資料 20 を御覧ください。「（仮称）こども家庭センターの設置について」、皆様にご説明したいと思います。

こちら、「背景と趣旨」と1番目に書いてありますけれども、令和4年6月に改正児童福祉法が成立しております。国が児童虐待の対応を行う「子ども家庭総合支援拠点」、国分寺市の場合は子ども家庭支援センター、それから、妊娠・出産・子育ての相談等を行う「子育て世代包括支援センター」、こちらは国分寺市の場合はいずみプラザに入っている健康推進課が行っている子育て世代包括支援センター事業というのをやっていますけれども、その部分について、今後、指揮命令系統を一体的にして情報の共有とか、より連携して支援を提供することを求めています、市町村に「こども家庭センター」の設置が努力義務となりました。これまでも連携はしながらやってきたところではあるのですが、国分寺市におきましても、こちらの法改正の趣旨を踏まえて、体制の充実と強化を図っていきたいと考えております。

中段下の「現在」というところに書いてあるのを御覧ください。児童福祉部門が今の子ども家庭支援センターでこの光町でございます。母子保健部門は健康推進課の一部ではあるのですけれども、泉町のいずみプラザの中に保健センターが入っていて、そこで行っております。これを統合して行って、こども家庭センターとして、場所としてもいずみプラザのほうに一体化させていきたいと考えております。

裏面のところを御覧ください。こちらの業務というのは、国が示しているものを書いております。子育て家庭の実情の把握ですとか、相談への対応、調整などを行っていくというのをはじめとして、要対協の調整機関としてもこども家庭センターが担っていくと考えております。

設置の時期についてということで、令和7年4月1日、つまり令和7年度なのですけれども、来年度、令和6年度につきましてはこの4月からスタートしますが、まず先に組織改正を行うことを今、予定しております。令和6年4月より、健康推進課の一部が母子保健事業を移管しまして、子育て相談室のほうに入ってまいります。ただ、場所は今と変わらなくて、子ども家庭支援センターはこのままで、保健センターはいずみプラザのままです。国分寺市の場合、今、新庁舎の建設をしております。こちらが夏ぐらいに出来上がって、11月竣工予定なのですけれども、年末、12月27日から引っ越しを開始します。年末年始出勤です。今、戸倉に市役所があるのですけれども、あそこが泉町に今、建っている新庁舎のほうに入っていく。いずみプラザの1階に高齢福祉課と健康推進課が入っているのですけれども、それも新庁舎のほうに移っていく予定です。健康推進課の中の母子保健をやっている部署の事務室が今3階に入っているのですけど、その事務室の執務室の部分と、ここの執務室の部分が、出て行った後、いずみプラザの1階に入っていくことを今、考えております。入っていく時期としては、本当にもうこの4月の前、令和7年なので、6年の終わりに出て行って、少し整理をしまして、いずみプラザの中に親子ひろ

ばの機能も持たせたいと考えていますので、少し工事なんかも入れたり、相談室を作ったりということ、今予算を上げている段階ですので、それで行って、3月の本当にお尻に引っ越しをして、4月からこども家庭センターとしていきたいと思っています。

ここなのですけれども、この施設については、親子ひろばの機能としては残していきたいと思っています。西部の地区拠点親子ひろば、地区の拠点のひろばですので、ひろばということでは残るのですけれども、子ども家庭支援センターの執務室としては、こども家庭センターに吸収されていく形で、吸収というか一緒になっていく形で、いずみプラザのほうに入ってまいりたいと考えております。

細かいいろいろなことはこれから決まっていくところもあるのですが、今日の時点でのご報告をさせていただきたく、お時間いただきました。

2枚目の資料は国の資料で、こども家庭センターはこういうものですよという国が示しているものをおつけしているものになります。以上でございます。

会 長：ありがとうございます。場所と、部署と、ひっくるめていろいろ変わるというのがこの1、2年の、お疲れさまですとしか言いようがないです。

それでは、資料21についてよろしくをお願いします。

事務局：それでは、資料21のご説明をさせていただきます。すみません、令和6年ではなくて、令和5年の9月1日ですね。すみませんでした。今年度の9月1日から30日まで、市内の親子ひろば12か所で行いました親子ひろばの利用者アンケートの結果がまとまりまして、一部ホームページでは、各ひろばの状況というのを公表しているところでございますが、運営協議会様のほうにご報告という形になります。数ですとちょっと分かりづらいということもありまして、それぞれの項目をパーセンテージで表示をさせていただいております。

利用目的については、記載のとおり、一番多いのがやはり他者との交流、あと、子どもを遊ばせたいというニーズが高いという状況になっております。

利用のきっかけにつきましては、市報・チラシ・パンフというところが多いところではございます。徐々にインターネットからの情報収集というのが、後ほど年度比較という資料もつけさせていただいて、見ていただければ分かるのとおり、インターネットというところも多くなってきている状況でございます。

あと、親子ひろばアンケートの中では、スタッフや利用者への相談経験がありますかという設問を設けております。実際にスタッフや利用者へに相談をした結果、気持ちとして解消されたかどうかというところも、1から5までのランクで評価していただいております。5が一番すっきりしたというものになります。スタッフへの相談経験ありというのが全体で48.9%となっております。スタッフに相談すると、6割の方がその内容について軽減したり、気持ちを受

け止めてもらえたということで、すっきりしたというご意見を頂いているところでございます。

利用者同士で、交流をしたいということで、前のところで22.6%の方たちが交流したいということで親子ひろばを利用されているというところですが、実際に全体の中の35.9%が、相談したことがあるとお答えを頂いている形になります。ご相談された方については、6割の方が相談したことによって悩みが少し軽減できたという形で、満足度が5という形の回答を頂いている形になります。スタッフ、利用者さん、いずれも4と5という評価が9割を超えているような状況に今年度はなりました。

あと、アンケートの中に親子ひろば事業の満足度というというのも、1から5までランクで、評価ということではないですけれども、答えていただく項目を設けております。大変満足というのが5という形になります。大変満足とお答えいただいているのが75.2%、4、やや満足、満足なのかあれなのですけれども、18.5%という形になっておまして、4と5を足しますと93.7%の方が満足いただいている状況になっていることとなります。

2ページ目を御覧いただければと思います。親子事業のアンケート、これまでの経過を参考にとおしまして、年度比較をさせていただいております。31年度がコロナ前という数値とご想像いただければと思います。コロナになって、利用目的というのが、子どもを遊ばせたいというものから、交流ですとか、自分の悩みの相談、子どもについての相談というのが増えてきた傾向にあったのですけれども、今年度につきましては、それがやや落ち着きまして、子どもを遊ばせたいというのがまた少し増えてきているところではございますが、悩み相談というところの数値も3割程度ありますので、親子ひろばが悩み相談の場所として、定着してきたかなと判断しているところでございます。

親子ひろばの満足度、相談経験の満足度につきましては、お読み取りいただければと思います。

3ページ目の利用のきっかけになります。先ほども少し申し上げましたが、31年度から5年度まで比較をさせていただいたところ、インターネットのところは11.7%から20.8%という形で、割合としてはここから入手している割合が増えているという形になります。また、注目していただきたいところがですね、産婦新生児訪問紹介、1歳6か月健診、ゆりかごこくぶんじ、乳幼児相談、母子保健関係のところからの情報収集をした情報を聞いてひろばの利用に繋がったというところになります。31年度の時はずいぶん母子保健全部足すと19%程度だったのですが、今年度27.6%ということで母子保健との連携が少しずつではございますが図れているという現状になります。報告は以上になります。

会 長：はい。ありがとうございます。利用のきっかけがなぜか31年度のものが入っているというところで。令和5年のものがね3ページ目にありますが、1ページ目のところが31年のところのものでそこはお読み取りください。本日の議題はこれで全て終了になりますが、次年度の予定は

事 務 局：まだ日程等も決まっていないので、またご連絡させていただければと思います。どうぞよろしく願いいたします。

会 長：はい、ありがとうございます。第11期としては今日は4回目でございます、あと4回分ございますので、また新しい諮問が4、5、6月くらいに出てくるという形ですので、またどうぞよろしく願いいたします。ただ、今回の諮問についてはこれで一段落ということでございます。ありがとうございました。以上で終わりたいと思います。

——了——